# 淺間山嶽面影艸紙

二

へ13
3244
2

へ13
3244
2

# 浅間嶽面影草紙二之巻

編者　柳亭種彦

## 第三　忘貝寄居虫修行者の物語

其のちかとうくもぐぬとび。記とべる夏なし。めくく永和五年改元のりく。康暦ようりされ武年春三月某日々。一敵が三回忌に當りしぐ。忘貝寄居虫ら。遠夜ようく父母の墓ふく。苔紙ちう仏華紙供じ。徴疫塚の前紙去ゆうど。霊前ゑ細く詩ゑ燈篭紙ゆけいやそうしとき嗜れ品紙机上ゑる（香紙ゑくく為とうあ念仏唱へ居らしぐ。鉦鼓の音もとくく。いと悽しくきさく。春宵短紙らしむと。詩ゑもけらしぐ。春の疫のめけゆくおくく東方ちくくさうく。清風吹来ちく彩柳紙ちくひ。一声の

柳ハ風になよし そそし佛坂の小乙女ふたりの為に
ほうへ柳く香をとよふ これるやすら色さく玉志がもと人も
ぎやうじやうへわれしらずなく〳〵 サ

右図の姉妹が至孝の事を作りなる田植うたの事どもかの郷にいまも名残るふと
え小仏坂ハ姉妹がまとやむひつる地名なるべくや名残考へし

鶯鳥高枝なめらく。花さへ雪とみまがひぬ。又も元禄と詠し古句
まいひきう（く。今頃ゑ斯きりし初かうしと。実の最期はおもひやり
不慮よりのうねしく。袖のうるおぶ。夜の間よりおきてふ雪まうめ赤
げく。かさこりの声そうめげく。一心不乱よ南無仏くくと唱名ー妹
ゑ閑御のきよ紅紙投来れと。花桶とよふさげつ車裏のかへ物
なんとつとおりしも。家よりめおきはる下奴切平。めへるしくくを
来う。一封の書簡ととり出候さーぐく言葉さへ出さねば赤貝へ
何故ゆうんとうちおどろき。仏前の燈篭をとりく讀ぐせば。故郷
よ残ーおきさへ切平が老母。病よりく死向ととなせば。早く方
のいとゆ紙やとひ。国元よりち飯れべーこ消息あり。赤貝へこぶ
弟の上よさくべつ。彼が仏ばうひとおめひあり。涙とりおちくゆ夏



とーも知らぐど切平衡くいつりれ、ゑ。君ゑちも赤貝めとぐ、我故郷へ
河内国高安とい呼よくいとゑれけき旅ゑを頻よゑ立ゑへり
がく。いぐ年も若うかとと君ゑち紙残ーおきおがはうゑくいゆ
へど。老ゑれ母の病急と告去せしよ。赤ゑ出平ゑひ
ゑけらと。ちぐしの暇ゑびてんやといひゑと。赤貝寄居虫へてゑ
ぐそさのいやゆせど。ぐひれよもとめがく。彼が仏よまゑせぬ切平
ゑ大よゑちまひ行装もそくいよゑへいそぎ故郷よおもむれ
ゑうかくく姉妹ゑ小女ゑ。其病ゆ塚のかさゑふ通夜ゑ。いと信や
ゑふ見えゑと。近郷の農夫其子の不孝ゑ紙いちーむれまゑ
彼ホが身上とかういく姉妹の孝順と訛りゑれ曲ゑよはぐり
苗植れのおうゑかゑうぐちと唄ひゑれが。其音ゑ今もゑ紙

村雨の唇上よりとえ。夏々画上よりうさても其後姉妹ら。只管父の
横死をなげき何卒仇人を探しいだし。最期の無念をとらさんと。神と仏よ
いのりとも。夫よりひたすら一朱が蝋奈古子々酒よ酒色よ殃夜へ夜りと
ぐ賭しく半時も家よりうど。其うへ此頃そちらつれく幸なく金のよ
さらしうえ。已が家をば賭の本銭よりうしなくとそとさへ朝日よむふ春の
雪の数日ゆうざるよきえうせ忘見がめとふ食客とおりく居らしかり身
よ半銭をもとめざるとが。鬱々としく更よ楽しゃど。斯くそうう春ち
うき夏もなうらやじと。一日同子の悪据をやうらひ隣村よ於稲荷の
社よかけおれら。神楽の面紋ぬとく来て。如此くてうらふべーとて点
頭のひ日暮とまちみう。此夜姉妹の小女ら燈火の本よ古こ物語
の書をひらきく居うしよ。やうくと音しく板戸をとちうち。ふ

山のぶれ大の男。ぬと入れと見とが。面い正しく鬼安なりう。呵と叫
んぶ逃げどが。異類異形の者ども。ゆくされよ立ふさが。金釈もる
く。二人の小女ら高手小手よいましめとれ。衣類茶器雑器所具のころ
ちうく。のれとめうゆれりの紙。土蔵うとび出をよ。二人ら浅猿く
もものなしくて。おそれく其人と見れよ。刈まい袖なる羽織とうぐち
泥よまれし草鞋ら。顔ら似気なる細目命ら。又ぶ色
し紙雨衣を効よまとら。葛籠を背おひく立出れら。張田亮の画
よ似うう。狼視ら於鐘馗大臣ら。然せよ斬せよと叱れら却て一
角三眼の鬼ども。蛭子ら塚ようふ。ふしく腰弱れら白髪の翁ら肩
ふかう。のれら眼鼻のゆがうるもの。武ら鍋の炭とうく面ら
四ちうれ崑崙奴のぶれもの。とべく山海経よも洩万画の図よも

恵根ホ神楽の面及ひ
姉妹乃家とおぼゆ

こへざれ盗賊ぞ。半時たゝぬ内墜を残さどぬをそさしべ二人い泣る
そちもなく。声ゝくゝ泣（ども。を巾紙ゆく口とけくそゝとべそと
さん公よゝろせど。只涙のめれうゝ泣居れむめゝ。めくて奈古
子を神示の面みて顔とかし。公のゝくみ姉妹が衣類雑器をぬをそさう
知音のやさるめつけそれ。何云ゝるさもめゝしく晴頃立かゝる。式光
景と見れたうゝ。大よおどろきさるおりむきるゝ。急ぎいきーめ坂
ひきかど紀忘貝が泣くりのがうゝなと初終を仲果。拳坂よゝり歯
がゝ紙ね。ゝと今霄家よめゝべ。縦百萬の強盗迎いれらもよる泣
くんゝうへとゝと立つ居つ分めゝうゝん。少時めゝく涙坂おさめ
嗚呼さゝとゝるゝ為ホが。宿世ゝさるゝもそるゝれべ。命さんめゝ
んよゝ。又世よ出れとものれべきよ。ふゝく歎くゝ庭ゝる例ひそと



さゝめぐゝるひゝぐさむゝとゝ。二人の少女い奈古子ゝ所業とも夢知ら
と。斬よ裏ゝちゝゝゝちゝしゝる雑器のゝゝよ茶道傳受の巻おと
いををきけれ亜坂。ゝゝちゝしゝく盗ゝさゝゝしゝゝ大よ老ひ。ゝ坂見て
良治君よさーめげんと。一巻づ姉妹が守袋よおさめ。夫坂さのゝよ
敷ロゝとぞぬをど今年巴之亟良治ゝ。皇都守護の在番よ赴キ
此国よめゝさゝい夫さん心よゝろせど只、且暮さゝゝ紀ゝる父母の
意ーくゝ。袖よゝくむ侯ゝり外よゝくさゝむゝるゝ。斯ゝくゝ紀
夕暮の度ゝゝしゝ。一個の修行者忘貝ゝ斬よ徬徨ゝゝ金華山に
おめゝむく修行者ゝゝくゝゝゝ。ゝゝつど道よ踏迷ぬ。いゝゝ方を望てや
旅店のれ大路よゝゝべき。ゝゝ（ゝゝとゝいひゝゝい忘貝巻ゝく式所ゝ
蛇田村とゝゝく。街道とゝよゝものゝねゝゝゝゝぐゝゝゝ旅店もゝゝと

まいりとりのもひさうろしく。夜の衣を薄及と今霄は代家まくめうさせ
ゆへといひて五る。修行者を大よ表び笈ゆかひし草鞋とうゃぐ仏
壇に向く回向をし。坐定りてくさまぐの物かうるを辛に修行者
いへれを五代に代頃出羽国にちもむさ月山湯殿山に系詰ぞ羽黒山
に登山せんと。田川郡鶴ケ岡の西南手向村にやどりしに。上人我ゆ止て
いらく近曽は羽黒山に強盗山塞ゆかん賊宝とうむひ人民ゆ害し
日暮ぶを怪有の幼術とやどにし雲ゆおにし危急に臨めば
こぐ姿とかくこゆるらく。四司も制を教度のさいごと拙うるしもへ名ひ
をひるしく難うり立飯をぬ。ぶとこふまのめうり見因ぶし呼めく。おろけな
れをもるめうごといひて五る姉妹を服と服を見のへせ必の中に大な
表ひ見仏同法のおもひゆをし。夜のけぬとを厚く布施しく修行者ゆ

帰し忘貝寄居虫に向くいひるる。妾為さ父の怨讐ゆ討めくへ
と。その年ぐ五ゆ得ざぶ。月日ゆ徒にすぐぶし。昨夜の修行者グ
いひし。羽黒山の盗賊ぶそ。父が最期の物ぐうり。恰も符契ゆ合を
ゆ。彼隠形の術をおこうひて。父と討されし曲者うり人女のむを
きかるぶ。猛ゆるなど武夫にもおとれべき。そなること表る彼山
塞におのむき諸国をめぐれ修行者の道にまよひし体にをくなし。
邑波ゆうくさゆうるさば。討得ざる度ゆうめじ。仕損じて殺され
るべ。一念怨鬼となつく。ゆ冥途へ連ゆえ。めれきにるおよびてゆ。
金ゆもあるふらせんと。ふたまけしくひきめぐとい寄居虫ゆうへ
もなさぞ。側にありめふ股美おへとう。空るうう討くめれ忘貝い
そがへしく者と侍らせ。火炉にかけける自在の竹にくて丁度ゆけとえ。

やどり
寄居虫
こそれぶし
忘見が
ふね
不意気
うろく
けんやう
剣法の
もれん
修練と
ちろ

寄居虫そなさん狂気なしるやとゝふる。寄居虫莞爾とうちゑみ。
姉上まへかねてうり。きのびくゝ替古をしるひさる。手鐘の鍛練既
まろく侍れなと者々丑ゞ忘貝ふ。まゝ新好そなさの言葉
いでや爲よ手鎗小太刀の術紙くゝ爲んとふうえゆく。妹の太刀と跨
返し。自在の竹と仮の竹刀。ゆるく去どいく立對へば妹も太刀既青眼
ゆかんをさ城討んとしけまわを。姉がいちへく突出を竹刀急く妹
が肩代かもう。妹ゞ切込太刀されを。きゞんさくちへゞ又はけいゝ。蹴
かつと裾ゝ秋の紅葉ゝ異ゆうゞ。花の顔ゞせ朱ゝ寛ゞ。少時爭ふ
其光景。花ゝ小蝶の狂ふゞゞく柳の風ゝめゆくゝふ似ゝう。浩所(日毎午
時ふゝ必と来れ花鬻老婆門首ゝ傍徨。花めせくゝの声ゝ驚き。
二人ゝうゝひゝまゞしく。忘貝ゝ箒既ゝう。墓かいゝうひ寄居虫



を火炉ゝ栄既ゝかくゞつ。空知ゝさる面持ゝく居ゝうゝ

## 第四

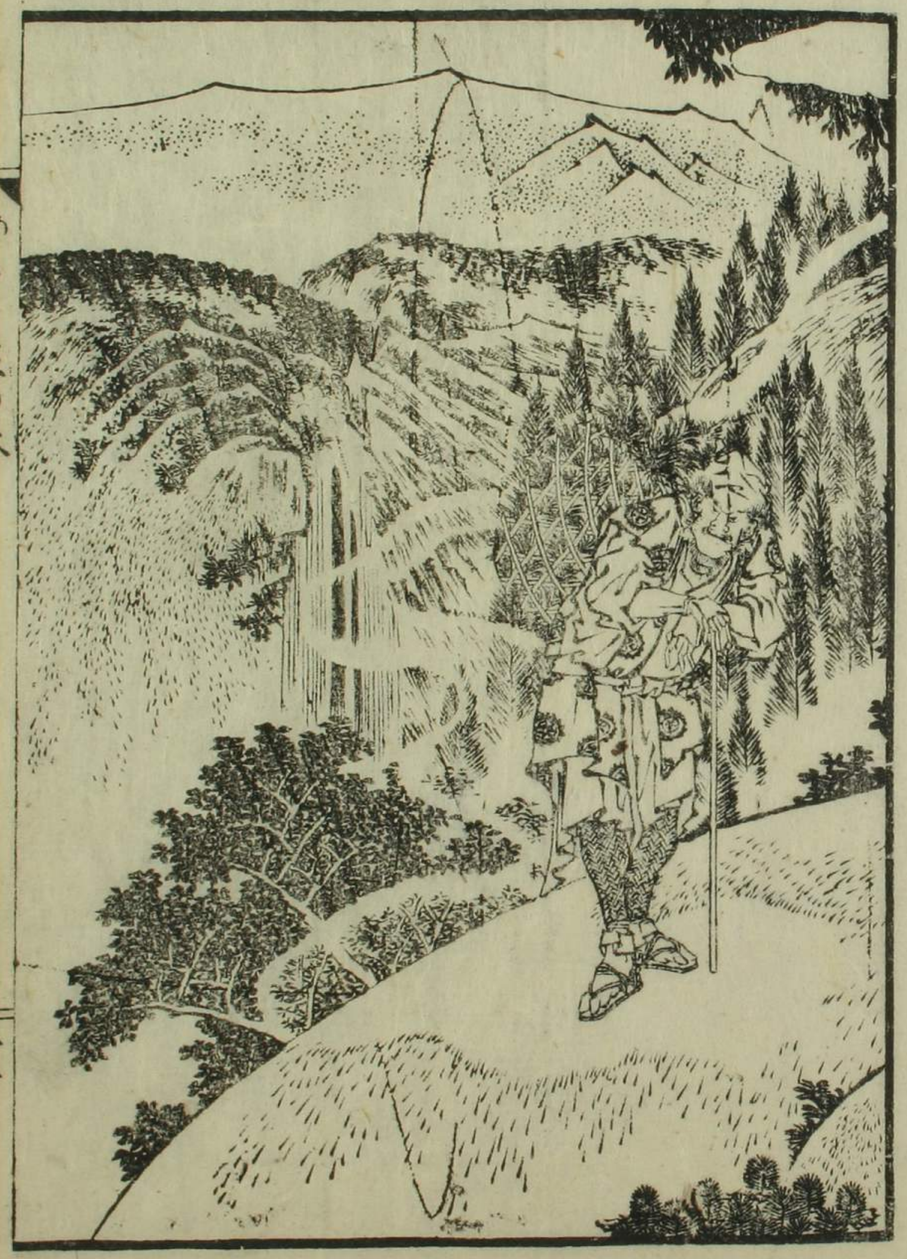
辛崎の社ゝく巴之亟初ゝく鬼麦ゝめふ

忘貝寄居虫ゝ奈古平既さむゝの悪提と努知らぬゝ夏の顛末ゝ咎へ
めげ。羽州ゝゆゝんゝ俱ゝく行ゝんといひゝ。奈古平ゝ仕課ぬと心ゝ発び
家財ゝ賣ゞしく路金ゝ宛姉妹ゝ持ゝく出羽国(ゝ心堅遠田玉造既へく
中山尾割山ゝ到ゝ此所ハ奥羽の境ゝ夫ゝう尾花沢舟方既ゝ過宮上川ゝ
そひ乾ゝ行ゝ足なんいるふゝめゝぬ稲ゝゝと詠ゝる名所なゝと大堅の松ゝ分ハゝる
詠ゝ徒ゝ見ゝ。猿羽沢既越ゝんとされハ右ゝ鳥海山面ゝと連ゝ。左ゝ月山
鑑ゝゝ聳へゝ見へゝ。ゝうるふ我孝ぬ教伝へゝ彼方ゝうめゝと公ゝ巳く
ゆゝうゝく鶴ゝ岡ゝいゝ教此所ゝ出羽国田川郡羽黒山の麓ゝ辛ひ
手向村といふゝうふ奈古平ゝ此三の知方めゝ巳ゞ彼者ゝとゝうゝく

膝をのれべきたかうの空家を買ひくめ。二五日をすひりろ〻一夕志貝寄
居虫と對くいひろ〻我〻蓄と多うらぬ者をのく。ろまくく斯てめる
へき。畢竟武門とうろしも他人成尋求んるはしめ是ハ女のうろも
いくや武夫の心ふうおうてよといひ論をる妾もさとれ名ひ伝ると
答しこ〻次日未且と起出ん。奈古子成ハ家と帰ー心づくも唯二人
ろと成夫と者ろ雲の山ろと山と日のれれ〻危くも健気ろれ
未通女ろうろ抑羽黒山とくきとへーハ人皇三十三代崇峻天皇の
御母蘇我の稲目が娘小姉君、爾基ろく。祭れ一所の御神ん伊弉
諾伊弉冊ろ二柱の御神ともろ又ん羽州九神のうちろれ伊須波
明神成羽黒権現と崇めらくくもれも。又ん稲倉魂ともヤス夫
當山ん羽州三高山の其一ろく月山湯殿山ろひ立く是のぐく

蘇ろう本社ろいくれ山路六十二町。本社ろう絶頂まぐく。十九町五間一尺。
いやぐ成須ん登山ろとめの稀ろ成。霊場徒ろ鬼魅魍魎の栖と
ろう。俎翠色成埋ろく千里ろ連ろ。日晴嵐を射ろ。一方ろ聳ゆ。峻
巓箕を學んぐ風木葉を鍼。懸線布成ろ成く水声礎成ろ。
峰崎嶇くしく劔をらてろぐく。道めぐろく羊の腸ろ似ろう。且ろ
牧笛雲成穿ろくぐ成ハ。夕ハ樵歌月を帯くゆ。成ん堀石頭
のろんろのろく。踏れ虎ろとおどろう成。又ん老松足りくろとと
いろくく蟠れ龍ともいひべし。頭成めぐくせぐ山嶂遠ろしく重
疊耳成ぐぐろ成ハ猿候叩くく寂寞數株の松柏森ろと茂り益も
日影とろくさえぐ苔滑ろしく常ろ雨の後のぐく。暗さを月ろ成夜
ろ似ろう。かく崎嶇かそろしき道をもいとはと。樵谷もろち越絶頂ろ

一ぢく
姉妹の小女
せうふ
樵夫が
せつわ
説話
山足
うつ



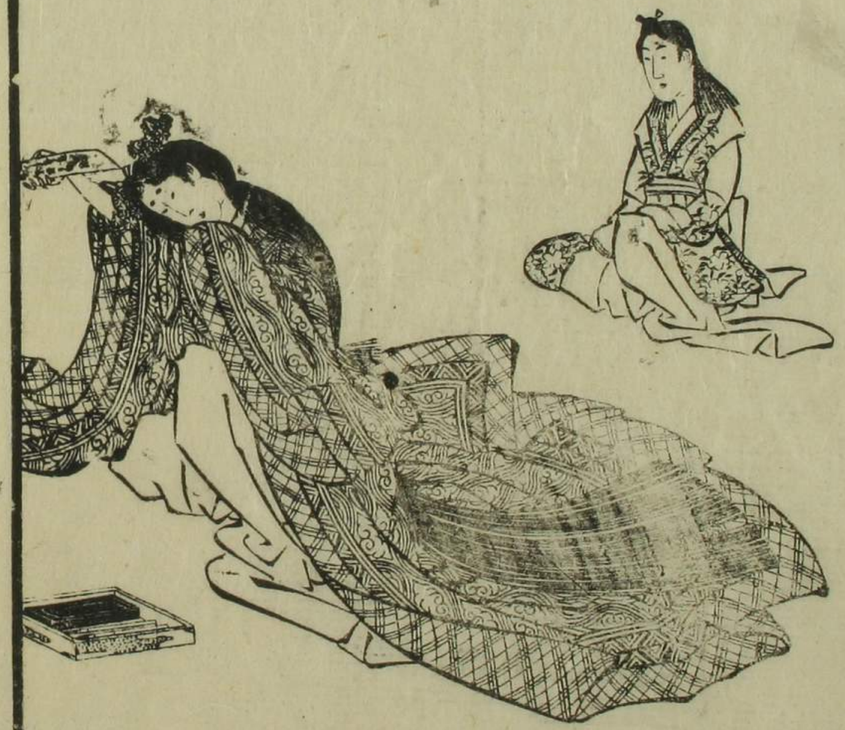
いくとしれずあるし。樵夫の翁遠くめぐりとれ谷うげよう。恣に歌ひ
ひ。頻く二人が前にさくく来る。莞爾としく笑くいへらく。ういる姉妹
の孝女かく千辛万苦して。父の仇人はらぐぬれて。さるるがら汝ホを。
宿世いとつくちく。薄命ととるる桃の花のごし。後に実はむとびて。
美味人をちちこびとといへども。花王と盛一時々見べるがむれもの
くくもし。當山の稲魂神のめとくるる雲愕ふくかくそめるも
盗賊のこのれべき山なるど。汝ホが尋れ仇人といふる。今律の四に
あり。東岡のくふくふちさちうるる。さるがら彼隠形の術はなどと
し女の小腕ふくくちやくく討れべき者にあるど。今都に赴きさう
るる益く。三年を此地に足とどめ。時いうる松はまべーといふ声
を松風に残る。谷川の水音くくくみひぐくのくみくいぶくくにあるき



うん翁の姿をかいくるとにあるえやうど。二人を大におどろき。夢うとおもへ
めるものうど。現とおもへとうくにあるものうど。おもしめうく忘見のいふを
りや彼翁も盗賊の余類なりやとおのへども。我こが胸中はさいること
恰も鏡に物のうれがごし。察さる所當山の神霊現じめひ。されく
にかとそんあるじとおひとう。千向村にくぶう。数月此所に住ひ
う。ちちく仇人の有所はさがし索れといへども。元来彼修行者を奈
古平が同子なるく。先頃奈古平が盗くとうつれるの紙大勢にかち
めさへど。此地へ逐来れ序一人の悪提と修行者に扮羽黒山に隠
形の術はなどさると者なりと言ひ。姉妹と當地に俱くくちうる
い。頻く艶女にうるるし。金はなどいとのまくむるく。皆のとうれ空言
るとべ羽黒山に盗賊とりう居れるい誰のうく知れ人もるいよく

彼山よりくだへちる翁ら。神霊よりくめひなしと心に敬ひ彼翁が言葉
よりうせ。都へも登らぐ。ひさかたの切平が故に紙はそもやちこひ〻に
却説伐同巳之亟良治ら。康暦二年弥生ばかりに。京都左番を
果々見ぐら。いざや奥州へくだべーと。近江路をさめくに色はしかふ
湖水に連る八ッの景色も見えまかーく。やが辛崎の神社へ詣で湖水ノ
汀よりいでく遠近に詠ひ見べ。遠水漢くとして天に連り満浦の
楊柳緑に吐風かまろく細浪魚鱗と刺。蒼くうれ老松ら青傘に
ひろ見ごく。是なん一ッ松くに。奥州のたてやぐも少へうる松なりと。言ふ
ふうち。蘭が浦の方よりも。下仕走嬬なんどつうきちくぶうら女車。おづや
うふ轡せ来に。神前に掘に見へさせ立出れ女に見れに。年正に二八で
うう。そのいでうちいふるに見べ淡粧強にようそわはさに。天性の顔色玉

のごく。眼まん秋の水に見へ。口まん春の花に見ひらうを。柳の髪丈とひとし
く。桜がさねのうちとうつうに。つぶ〻うどうちかけうに見べ。裾ら〻めるまくふ
うちひろぐ〻ひえうらだ〻めうの緋の袴に見ふうぐ。蝶ら〻の要うちうれ
枝横目のひめふぐ。のどやうふ扇かねて投けうに見る。道に見ふ
歩行れさま。り式人に比べんまハ。花も却く色なく。雪も却く黒しと
やせん。彼小野小町が〻ふ〻び式世に来に。しなめうちをへば。天津乙女ノ仮と
下界へうらしまやめうん。実に花ふ言葉めうく。柳のいうとううけ
うう。巳之亟が侍ども。彼人と見れうう。魂ぐ〻人変を知ノうと。故
も数うれ女性うみと。袖ひきのひく姦きくいひちふに巳之亟侍
と証ー。いそうさし。いうに姫君ようも知れへうざるふ。吾妻人へ
ロさうにし。都の者に笑つに。そう無礼れ変めれら。伐同ノ家ノ



ちど昌度く道を弓なりさけく。六帰らんとるさとふ。元来巴之巫も花車風俗の男まさく。顔形閑雅なるとべ。彼女性も遅刻ようのうちちるちひとふくめくどもひろん女童成走らせく。巴之巫成神前よりねきぬ巴之巫おそるく楷成うち登るゆ女性を巴之巫ゞ側近く居ろう。察するよ吾妻男都ゞくの在番ろく。故郷（ゐめむきのふ道ゆきゞろよ。當社へ来給ふ事ゆふと足れを妾ゞひがめるうやいざ酒一つきとしめて旅のうさ成も忘れとのへと。偏提樏子ろう出させ。只管酒成ちくめけど。巴之巫大よりおどろき。ちゝもりに。僕を無位無官の暴夷。天上雲ノ上人と。莫成連ねべき者よめるどもれさせゆへと退出んとるとと少時と押とゆ。君此名とよりるゆどとも。浅間巴之巫良治君と共夏い妾ろくも知ろ侍ろ。跡ろひくまいりしと。女童よ銚子ろくせ。盃ゆ一く巴之巫ろさ一ぬ。巴之巫い不審なゆろ盃成ろうめげく酒半成飲ゆ一く。膝のかろへ代れろう。彼女性いぐれ者ゆろせんと。拵めふゞ成つまゆ一く。香いしき墨をろ。何やろん書く巴之巫よ贈れ。巴之巫ろうめげく吟ゞとべ

勿念　跡君者雖言相時

かの女かさねく。君を此ゞて忘ろしめとやと問ひろとべ。巴之巫少時ゆろく。勿念　跡君者雖言相時何時知而加吾不意有年。此ゞ拾遺集よ。題ろくゞと人たくくのせらとれども。其えを万葉集。第二巻。柿ノ本ノ朝臣人麿ゞ妻。依羅ノ娘子。人麿と相別の歌とゆゆへゆくといひりとべ。彼女性扇をゆろく欄を丁度ろち。さていろよろゞど。和歌の道をもくゞふとゆひ侍れ。妾ゆ或家の

浪夏草とやめのあるおがたづうしき夏なとというそや清水まふでの
もてうう。不斗君は意そめ〳〵く露ことをおくひさもうく〳〵は天て
媒のちもぐると。一日二日とくちうおくうち。そや君はい都は立出ふ
と歩うう。そぐうしき夏なる忘とうく公は衛とはあくまえうひく
まいつしそや。心やうはいさくう斗を答へ疎人はもなげの言葉を
ふるとと。強はかくロ説のひるとべ巴之巫も白地はおくうちはけく
懸想は。何く答ふべき言葉もうく。さ〜うふさく居うしが。時
あうく顔ふてめけ。暴夷のむく。はけき。某へめつき公の仰言を者
はめやうく不慮はおそへはとうも。とはとはも一人の母の。君は
も双親やっとへ〜。さとべが互はうううねは歩へく。後都をいあと
うもふ立とくく。秋うセ吹ぬそのひまふ白川の関のあなさは答

のうとべ〜。こや群鴉栖はかつ。夕陽斜はうんこなせがいざや乃帰舘
を催されまれべうめやうれもう旅舘は赴えと。西東は利別ね

第五

星影五右エ門幼術とりく巴之巫が矢玉はあれ
是ろさくを星影土右エ門。奥州へ追放られくう。下徳常陸
へ横行はしさまぐの淡恵と行ひ。今を彼地はもくく。一先
都へおもむえと。廻国の修行者ふいでうう。武蔵相模のあのうう。
めうぐ川原は行暮れう。ともあれ松の樹ぐうは低帳とれ野宿
しく居うしあう。外面のあさは何やうんさうしき紙。低帳はかげく。
清き月は熟見とべ。坂東順礼と見えく。十四五才ぐうう妹き
女と。川ぐの悪親ぐも。十余人まは中はうやとき。一人がいは所殺され
うれぐつけ来うく〜。地は見いとられしめはしとう。かよきちうふ

めらかなること。我とるもの来れべし。大磯小磯なんどいふべし花巷
とのみ所へ遊女の賣るもの。武木綿の糸のもの。錦の袂ふひきうへく。
油つけどの引うの束髪も数うるまれうへみ耳の早寄といふく。面白い
うる紙屑。口の美味どくうひ。女童と二人三人ひれ連く武上の栄花
くるしたやうく蒼紙のもべしと嘖河ひやよ白菰。これを先うの
出談議ふく口のをぶうくうの。斯更紙ひけく言用せど。武女
ふうの蒼うれも。若唖子う竈うんも計りがしいぐ汝しかれ
べーといひるべ一人がのふ今黒花のいぶく。武艶ずれ顔だせあくる。
花主みうけ出され奴ことがづれ人へ忽地なり。ずの武方と向く義麗
顔見せよと。飽ずぐみ嘲唖ずるこれ小女を只頭とこれ。何といふへも
くるべしがどうくと立く二人が脱らびかい捆る。何の苦もなく投退

うう小女郎とるひのるとうそと。割木とるく打くのれいの柄杓ず取
丁度うけるの裾紙うへべ足どもうみ踏遠へ水の岡へ月彩の日
ふ足えつれとまふる変めるつと。さうの大勢めらひうの無二無三
の割木とうめげううかう紙。ぐぐとうく川へ投ふく或を松ニ
根くく頭とぐれるもの只一人の未通女の。敵きれるかく。四
方ふ飢と逃散うの。星影土右エ門ふ小女ず為体紙面もうぐぐち
を居ーう窮の錫杖ニ捉く。小女が後の立うれの小女へ先うう
の働さの身体を労れるれれ。小時息を安とめんと落ちうる拓
杓とうめげ。川水と扱うく咽紙うるるさんとれうれう後うがふ
土右エ門ず姿彷彿としく水面のうつれのおどろれ竹杖のふこと
うる短刀とぬれるうち。土右エ門ふ切くかれれ土右エ門へ者と同ー

庚申


相模国

錫杖とりてうちしをれば。それ待れよ小女子。それを修行者の初くれく野宿はしられまじく。先の悪掘とひとしうらごとをぐ心をもつめ短刀とかさねめへといひ乃至ハ彼女わく笑ゑ。実徒めを修行者ふくかハさバ妄悪掘よかこまれこれ危急とをくひあらうえよ。其あり余所めよ足ゑく身体労迷し由部と足をまし。打めらんぎを光景を一人汝も盗賊ゑうらん女ゑぐらも力量とをのゑての一人旅斬らくのゑ斬ゑくえよと。又土右エ門ようつくめ敷。土右エ門莞余とまを笑ゑ。それも諸国武者修行紙ゑろぎを者ゑのれい汝ぎ紀小女相ゑまハ不足ゑまどいで剣法とをろうんと錫杖よ仕ゑしかぬ以ゑ少時がわゑ切ゑぶ時よ向の木蔭ゑう。矢一ツ来つて土右ゑが肩の尖へぐさとうつ。土右ゑ大よおゑろき白紙佶とうろ足れば数多の武士ゑ一文字よ走ゑ来ゑ。土右ゑを取かこむゑうさをゑれば。土右ゑハおゑゑゑゑけをれつゑれ。紙帳の内よゑゑゑいゑ。優くと鉦鼓打ゑし。念仏の声ゑゑみゑを少へゑゑ。めゑゑの武士紙帳のめぐ氏とゑかとゑ。手くふ紙帳とひんさゑけば。奇ゑれゑゑる鉦鼓一ツめ敷のゑゑゑく。今ゑ念仏の声ゑゑゑる土右ゑが姿ゑ。いづ地へ行ゑんかいゑよ足へゑゑど。唯惘然ゑるばゑゑゑ衆物かんをへさせ。半ゑめゑゑ立出ゑゑ是別人よめゑゑど。巴之亟良信ゑゑ。良信ゑ床机よめゑゑ。小女よ白く言ゑゑ今汝が戦ひ修行者ゑ。元某が家臣星影土右エ門とふめく由根めゑて館とぶ。四年ゑゑ追放ゑゑを。然れよゑ紙東国よめゑく。さゑぐの悪逆ゑゑとよ。彼ゑ殊よ怪有の幼術をわどに姿氏めくを変自在ゑゑと世ゑゑひしぐ巷説み遠ゑ氏為体一定ゑ為ゑ。彼ゑ毒手よ害ゑれば

庚申塚
相模

不便さふ。衆物のうちより。半弓を射かけしとみる。弓矢の徒まれ彼も妖物紙行よ夜のさかぐ。逃去りしとちがえり。山ばざくらは花月小女と似て力量さるとも不思義の一ッなり。何所いづかれものゝやしこ深切に問ひなれ。小女答へく妾は冊波国の者なれが由縁めつく。実は父母いつれの者とのふこと紙一も知らず。まゝ子よりて子と味ゝくくられ辛しく成出なせしが。其父母さへも不幸はしく。去年の冬一時に世紙去孤のうゑ人うゝ奥州のめさに尋ねべき夜めつく。僅の数力をうゝく。女の身乃恐うしとに名ひまうゝ。御氏所きく来りしが。計らずも悪梶に出会。斯る品にかうびゆうと言なれば良治かさねく。されい伐間巴之亟とふ者みく。都ざまう奥州へくだれものなれが。汝も彼四に赴くとのれいはれ車なり。芽ふ俱しく物べきに。為ハ何とふやうんと問ひぬ。小女答へく。



なに世へ伝ぐ。まゝ子よりと異名のやうに言しのゝ。定見る名もゆつどとのひ名ば良治ちうひ伯士の子なりとば。ぜも定りがたしいる。古奇々同つもどゝ行のうれ女をもづくうく。大きく何とふべきとふ。雲間遥に時鳥一声ゝ紀ゝるれが幸ゝる。今ゝ汝紙べ時ゝ。ふべゝ。信ふ命ドくのつくさつゝも。奥州さくぐり。